

として受け入れられるに至り、覚盛・叡尊の両者は、それぞれの立場から善珠の理解を基の説と融合させる形で展開していったのである。

注

- ① 『大正大藏經』四五所収
- ② 『大正大藏經』七一・『日本大藏經』六六所収
- ③ 石田瑞麿『梵網戒經』の注釈について（『日本仏教思想研究』二一九八六）
- ④ 末木文美士『日本法相宗の形成』（『仏教学』三二一一九九二）
- ⑤ 『大正大藏經』四五 二九九頁上—下
- ⑥ 『大正大藏經』七一 二五七頁中—下
- ⑦ 善珠は「菩薩不_レ但_二成_一身語_ノ無表_ヲ。亦成_二意_ノ無表_ヲ。（中略）若意_ニ無表_ニ。菩薩云何持_二三_一支戒_ヲ。」（『大正大藏經』七一 二五五頁中）として菩薩における意業無表の重要性を説いている。
- ⑧ 基は、処中業に無表ありとする説、無表なしとする説の二説を挙げ、「於_二二説中_一既_ニ無_ニ顯文_一。亦任取捨_ヲ。」（『大正大藏經』四五 三〇〇頁上）としている。
- ⑨ 『大正大藏經』七一 二二六〇頁 下—二二六二頁中
- ⑩ 叡尊「表無表章血脉相承次第」（『関東往還記』紙背『西大寺叡尊伝記集成』所収 大谷出版 昭和三十一年）
- ⑪ 『大正大藏經』六六所収
- ⑫ 江戸時代の学匠である基弁の著『大乘法苑義林章獅子吼鈔』によれば、前者が中川実範の説であり、後者は貞慶の説であることが知られる。
- ⑬ 大乘法苑義林章（『大正大藏經』四五 二九九頁中）
- ⑭ 箕輪顯量「叡尊の戒律思想—犯罪意識を中心に—」（『大倉山論集』三六 一九九四）

パーリ文献を中心とした

アスラの諸相

西 谷 功

目 次

序 論	
第一章 問題の所在	
第二章 パーリ文献にみられる五道・六道の問題	
第一節 パーリ論書 <i>Kaṭṭhavaṭṭhu</i> の見解	
第二節 ニカーヤにみえるヴェーパチッテイ衆	
第三節 ニカーヤにみえるカーラカンジャ	
第四節 ニカーヤにみえる「その他の」アスラ	
第五節 ニカーヤからみえる五道の根拠と六道の問題	
小 結	
第三章 パーリ文献を中心としたアスラの性格	
第一節 「その他の」アスラ衆の定義	
第二節 アスラの性格	
第三節 デーヴァとアスラの戦い	
第四節 アスラの住み処	
第五節 ブッダに歓喜するアスラ	
小 結	
第四章 パーリ文献にみられるアスラ道的位置	
第一節 MN. 97経 <i>Dhamañjī-sutta</i> の用例	
第二節 <i>Kuṭṭhaka-jātaka</i> におけるスジャーターの輪廻遍歴	
小 結	

序論

仏教文献中には、アスラ (asura, 阿修羅など) は輪廻する行き先としての六道のアスラ道を担い、天に住むデーウア (deva, 天・神) と戦う悪神として散見する。

ところで、未解決の問題として、輪廻する行き先としての「五道」「六道」の相違がある。「六道」とは、天・人間・アスラ・畜生・餓鬼・地獄である。「五道」とは、それよりアスラを除いた五つの世界をさす。そして、天・人間を善道、畜生・餓鬼・地獄を悪道とにわけ、衆生は善道に生まれ変わるべく善行をなせ、と説く^①。また、「六道」を説く場合には、アスラを善道に入れるもの (三善道) と悪道に入れるもの (四悪道) とがある。アスラをいずれに属せしめるのかということは經典・部派により異なっている。

アスラの有無によって「五道」「六道」の相違が生じるが、これまでの先行研究によると、伝持する部派によって異なるものとされている^②。その論拠は主として論書類を資料としたものであり、「五道」「六道」というタームに注目し、その比較が中心となっている^③ようである。それゆえ、その相違を生じさせる原因と思われる「アスラ」自体が考察対象とはなっていない。さらに、先行研究においては「五道」「六道」の相違はすでに諸部派の間で生じていたという前提で考察されているようである。したがって、同一部派内では

パーリ文献を中心としたアスラの諸相

相違はみられないという前提があるように感じられる。

また、アスラを除いた五道説の場合、アスラの何が否定されるのが問題となる。「アスラに生まれ変わることに」の否定なのか、「アスラの世界」の否定なのか。

そこで本稿では、パーリ文献を中心として上記の先行研究において考察対象としてはとりあげられることの少なかった「アスラ」を中心に論及してみたい。それによって、「五道」「六道」の問題を解明するための一つの資料が提示できると考えるからである。

本論

1、パーリ文献で「五道」「六道」の相違に関して言及する資料は論書 *Kahāvuttu* (Kv. pp.360-361) である^⑤。これより、①上座部はアスラ道を認めず、五道をとること。②アスラは少なくとも、ヴェーパチッティ衆 (Vepacitti-parisa)・カーラカンジャアスラ衆 (Kālākañḍakā asurā)・[その他の] アスラ衆 (asurakāyo) の三種類の種族があること。③ヴェーパチッティ衆は天 (deva) に属し、カーラカンジャアスラは餓鬼 (petā) に属すること。④ヴェーパチッティ衆は天と同じ姿 (種類) であり、同じ財産を有し、同じ食事をとり、同じ寿命であり、天と婚姻関係を有するものであり、カーラカンジャアスラも餓鬼と同じであるということ、などが理解される。

これを踏まえ、ニカーヤから、②の三種類のアスラを概観する。ヴェーパチッティ衆とは、アスラ王ヴェーパチッティに属するア

表1

サッカ	持戒者	善法者	忍辱	慈心	非暴力	和平	口論せず	天界に住む
ヴェーパチッティ	無戒者	悪法者	瞋恚	一	暴力	不和	口論する	海底に住む

表2

	用 例
四悪道	<i>Khuddaka-pāṭha</i> , p.5; <i>Sutta-nipāta</i> (Sn.), v.231; <i>J.III</i> , p.456 (散文); <i>J.IV</i> , p.172 (散文); <i>J.V</i> , p.363 (散文)

スラ衆である。この用例をみると、*Samyutta-Nikāya* (SN) には神々の王サッカ (Sakko devānam indo) がヴェーパチッティを「古の天 (pūṇadeva)」と述べている。^⑥しかし、その他の用例はサッカと対比的に用いられる(表1)。^⑦

それでは、カーラカンジャアスラはどうか。この用例は数例に留まる。

DN.Paṭika-sūtaṇṭa には、裸形行者が死後、「諸々のアスラの内でも卑しいカーラカンジャというアスラの身体として、そこに生まれるだろう」^⑧とある。これより、アスラで最も低い身分がカーラカンジャアスラとわかる。しかし、他に「大恐怖あるカーラカンジャ」^⑨、また、*Jātaka* (J) の註釈には「菩薩は」焼けつく渴望や飢えと渴きのあるカーラカンジャになることはない^⑩とあるだけで、餓鬼とともに言及されるとはいいがたい。しかし、「大恐怖あるカーラカンジャ」とされる箇

所は、アスラの名前の列举とともにみられ、また、「」にあるカーラカンジャの特徴が餓鬼の特徴とされる飢えと乾きと同様である点は示唆的である。^⑪この数例から、カーラカンジャは一応餓鬼と同種とみなしてよからう。

「その他の」アスラ衆の用例をみると、ラーフ・ウェーローチャナ・パハーラーダなどのアスラ王たち、また、普通名詞のアスラたちも存在する。^⑫彼らは「古の天」という点を除き、表1のようなヴェーパチッティの性格と類似する。

以上の諸点よりデーヴァの性格と対立する概念としてアスラは存在し、デーヴァに属するものではないといえる。すなわち、仮に *Ke.* の論者が述べるように、ヴェーパチッティが天に、カーラカンジャが餓鬼に属すとしても、「その他の」アスラ衆はいずれからも別立されるべきアスラと考えられるのである。

2、さて、*Ke.* の論者は「五道」を主張する。確かにニカーヤでは「五道 (pañca gatiyo)」の用例はあるが、「六道 (cha gatiyo)」の用例はない。それゆえ、*Ke.* の指摘は正しい。しかし、「六道」なる語はみられないが、後世われわれが認識する「六道」の概念は *Khuddaka-Nikāya* (KhN) に収められる諸経を中心に用例がある(表2)。

次に「六道に相当する境涯」の用例を示す(表3)。

また、アスラを含めた「三善道」の用例はない。「三悪道」の用例は四ニカーヤのみにみえる。^⑬これにより、ニカーヤを伝持した上

表 3

経 名	内 容
<i>Thera-gāthā</i> (<i>Thag.</i>), v.1128	心の故に、われらはアスラとなる。そなたの故に、われらは地獄の衆生となる。またいつかは畜生となる。餓鬼の身を受けることもまた、ひとえにそなたの故である。
<i>Theri-gāthā</i> , v.456	四つの落ちゆくところと、二つの境界 (<i>cattāro vinipātā dve ca gatiyo</i>)
<i>Theri-gāthā</i> (<i>Thig.</i>), v.475	天衆・人びと・畜生の胎・アスラの世界・餓鬼たち・諸地獄においては、苦痛の衝撃が限りなく見られます。
<i>Peta-vatthu</i> , p.66	諸地獄・畜生たち・餓鬼たち・アスラたち、或いはまた人びと・天衆をあなたはみて
<i>Itivuttaka</i> (<i>Iti.</i>), p.92	マーラの拘束から脱しない彼らは/地獄・畜生の胎・アスラ・餓鬼の境を増大させる//
<i>J.V</i> , p.186 (v.31)	地獄、そしてまた畜生界・餓鬼界を増す。また、愛欲のとりこになってアスラの世界をも増す。
<i>J.IV</i> , p.490	地獄・畜生・餓鬼・アスラの生を脱した (散文)
<i>DN.III</i> , p.264	地獄・畜生・餓鬼・アスラ・デーヴァ (長寿天) の五つに生まれる、とある。

座部は、アスラを「古の天」と認めつつも、悪道に属するものと考えていたといえる。

このように、上座部の伝持したニカーヤには、「五道」「六道」が説かれていた。それでは、定型化した「五道」と定型化していない「六道」に相当する境涯はどちらがより古層に置かれるべきか。*Thag.*はパリー文献中においても古層とされる。^⑮しかし、どちらがより古層かという問題は現存資料の成立年代が確定していないため、現段階では「五道」「六道」は異なる伝承として並存していたと考えるにとどまらざるをえない。

それでは、*KMN*の諸経に説かれる「六道に相当する境涯」は、どのような人びとが述べ、聞いたのか。*Thag.*, v.1128を詠った長老はターラブタで、彼は以前、ラージャガハで舞踏の座長であった。^⑯また、*Thig.*, v.456・v.475はスメーター長老尼が詠った。彼女はマインターヴァティーのコンチャ王の娘であった。^⑰彼らは「六道に相当する境涯」を認識していたのである。また、*Su. Petana-sutta*はヴェーサーリーに飢饉などの災害がおこったとき、それを鎮めるためにブツダがリッチャヴィ族に説いたとされる。^⑱彼らにとって、アスラは「六道」として別立されるほど有名な神格であり、ブツダはそれを認め、「四悪道」などとして説いたと推測できる。

また、①の散文部分において「四悪道」の用例がみられることから、①に註釈が施される時代には、デーヴァとアスラの対立概念は普及し、アスラは別立されるべきものとして、「四悪道」が認識さ

れていたと想定することは可能であろう。^②

結 論

以上の考察により、「五道」「六道」の相違は、部派を異にするこ
とによるものではなく、すでに上座部内で「五道」「六道」の輪廻
説が並存していたことが判明した。さらに、「五道」の用例は四ニ
カーヤのみにあり、「六道」に相当する境涯」の用例は、一例を除き、
*Kh.N.*に収められた諸経に散見する。ただし、*Kv.*成立当時、上座
部が表出するものは「五道」が主流であり、「六道」は少数派であ
った。しかし、「」の註釈などの用例から理解できるように、「」の註
釈者たちは、「六道」を意識したのであろう。

また、「五道」を表出する四ニカーヤにおいても「アスラに生ま
れ変わる」とは *DN. Paṭika-suttanta* などにより理解でき、「アス
ラの世界」の存在場所も海底に確認できる。^③ すなわち、「五道」を
示しつつも、アスラの存在は否定されていないのである。これは、
「五道」を表出する上座部においても、一方で「六道」と解釈でき
る素地が胚胎していたことを意味しているのである。

パーリ語テキストは PTS 版を使用した。

註

① 善行による生天の思想に関しては、金漢益 [1999] 「生天と涅槃の

関係―仏教文化史の視点から―」『東洋文化研究所紀要』第137冊、参
照。

② 主要なものは以下のとおり。平川彰 [1974] 『インド仏教史』上巻、
春秋社、p.233; 壬生台舜 [1983] 「六道説に関する二・三の問題につ
いて」『中川義教先生頌徳記念論集 仏教と文化』同朋舎出版・並川
孝儀 [1984] 「鸚鵡経類の展開―特に Mahākarmavibhaṅga を中心
として―」『仏教研究』第14号; 同 [1985] 「Mahākarmavibhaṅga
の所属部派について」『印度学仏教学研究』第33巻第2号。この中で
壬生 [1983] は『法華経』などの大乘經典の異訳を比較検討し、『法
華経』内でも「五道」「六道」の相違があることを指摘する。また、
並川 [1984]・同 [1985] は、所属部派の異なる鸚鵡経類に着目され、
その経に説かれる輪廻の世界が、所属部派の違いによって「五道」
「六道」の二種類に分かれると指摘される。

③ 註②の諸研究よりみるに、六道説をとる部派は、出世間部・犢子
部・安達派・北派などである。一方の五道説をとる部派は、上座部・
説一切有部など。

④ パーリ文献以外で、「五道」「六道」の相違に言及する資料は、『大
智度論』（『大正』25巻、p.280a）『雜阿毘曇心論』（『大正』28巻、
p.936b）『婆沙論』（『大正』27巻、p.868b）など。cf. 並川孝儀
[1984]・[1985]

⑤ *Kv.*の成立年代は確定していないが、水野弘元 [1997a] 「パーリ
聖典成立史上における『無礙解道』および『義釈』の地位」『水野弘
元著作選集3 パーリ論書研究』春秋社、には先行研究を整理して
*Kv.*の成立年代を世紀前2世紀の後半とする説を紹介しておられる。
また、*Kv.*の概説として、同 [1997b] 「『論事』(Kāḍvāṭṭhu)」前
掲、水野 [1997a] 『同書』所収、を参照。

⑥ SN. I, p.222.

⑦ 表1にみえる性格は、*Anguttara-Nikāya* (AN.) I, pp.91ff.; SN. I, p.
221; SN. I, pp.224-225; SN. I, pp.222-224; *Dīgha-Nikāya* (DN.) II, p.

259, の用例による。

- ⑧ DN.III, p.7; *Kāḷakañjīkā* (*Kāḷakañjīkā*) *nāma asurā sasba-nihino asura-kāyo tatra upapajjissanti*.
- ⑨ DN.II, p.259, *Mahāsamaya-sutta*; *Kāḷakañjīkā mahābhīṃsā*.
- ⑩ J.I, p.44, *Dīṇenidesa*, v.253. また、藤田宏達 [1981]『仏伝資料の考察―『ニターナカタ』覚え書―』古田紹欽博士古稀記念 仏教の歴史的展開に見る諸形態』創文社、によると、この偈を引用した註釈文献は不明であるという。
- ⑪ *Paṭika-suttanta* に対応する『長阿含経』『阿菟夷経』には、*Kāḷakañjīkā* の箇所が「起屍餓鬼」(『大正』1巻 p.67b) とある。「起屍餓鬼」とは屍を起す餓鬼であり、死体に憑いてこれを活動させる鬼神であるという。この漢訳に相当するものとして、Skt. *vetāla* が想定される(辛嶋静志訳註 [2001]『阿菟夷経』現代語訳「阿含經典」長阿含経 第4巻 平河出版社 pp.41, 212 の註8)。
- ⑫ DN.II, p.259; SN.I, pp.50-51; AN.IV, pp.197ff; SN.I, p.225f, etc.
- ⑬ *Majjhima-Nikāya* (MN.) I, p.73; AN.I, p.459; SN.V, pp.474-475 であり、これらはほぼ定型的表現であらわれる。cf. DN.III, p.234; MN.II, pp.193-194, etc.
- ⑭ ニカーヤには「三悪道」なる語はみられないが、いわゆる「三悪道」と認識される「地獄・畜生・餓鬼」の用例は、SN.II, pp.68, 71; SN.III, pp.225-226; SN.V, pp.342, 357, 366, 376; AN.IV, pp.247-248, 378f, 405-406; AN.V, pp.182, 269-273, など。また「地獄・畜生・ヤム」の用例が一例ある；SN.I, p.34.
- ⑮ 中村氏は「アシヨークカ王時代(西紀前3世紀後半)または少しく遅れた時代ではなかろうか。」(中村元 [1982]『仏弟子の告白』岩波文庫、pp.297-8)とし、早島氏も同様の見解を示されている(早島鏡正 [1985]『原始仏典9 仏弟子の詩』講談社 p.307)。また、*Iti* も同様に古層であるとされる(水野弘元編 [1966]『新・仏典解題事典』pp.61-62, 前田恵学「阿含経」の項)。cf. 前田恵学 [1964]

パリー文献を中心としたアスラの諸相

『原始仏教聖典の成立史研究』山喜房仏書林。

- ⑯ *Dictionary of Pali Proper Names* (DPPN.), vol.I, pp.1000-1001.
- ⑰ *Thig.*, vv.448-522; DPPN, vol.II, p.1251. マンターウァティーが現在いかに比定されるかは不明である。
- ⑱ *Paramatthajotikā II* (SnA.), vol.I, p.278; 村上真完・及川真介訳註 [1986]『仏のことは訳註(2)―パラマッタ・ジョーティカー―』春秋社、p.229, 参照。
- ⑲ J.の註釈年代・製作者は未解決であるが、前掲、藤田 [1981]はJ.の註釈書を「フッタゴースアよりは後であるが、5・6世紀のタムパール時代の…(中略)…成立していた」とする。また、森祖道 [1990]「註釈文献の種類と資料的価値」『水野弘元博士米寿記念論集 パーリ文化学の世界』春秋社、では、J.の註釈書をフッタゴースアの作にすることを疑問とされる。
- ⑳ パーリ文献の註釈家の一人であるフッタゴースアの著作 *Visuddhi-magga* には、悪道にアスラを含める用例がある (pp.427, 501)。J.の註釈部分などと考える合わせると、註釈時代にはアスラは六道の「アスラ道」を担うものとして認められていたのではない。
- ㉑ DN.II, p.259, *Mahāsamaya-sutta*; *Jitā Vajira-hathena sammuddam Asurā sita* (金剛手(サッカの異名)により征服されて大海に住むアスラたち)。cf. *Vinaya*, II, pp.237-238; AN.IV, pp.197-201; *Udāna*, pp.53-56.